

浄土

七月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一週一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別渡航郵便第三五二号)
昭和三十八年六月二十五日 印刷 昭和三十八年七月一日発行

第二十九卷

第七号

法然上人が現代においてになったら「選択本願念仏集」をこのようにおときになるであろう 念仏信仰の真髓を明らかにした全浄土宗徒必読の書

選 擇 集 私 解

大正大学教授 文博 竹中 信常 著

新書版
定価 1100円
送料 120円
送料 300円

目 次

宗祖と共に
やすらげき旅路
念仏にすけささぬ
特急「ごくらく」号
砂糖と塩
いつでもどこでも
ふり仰ぐ山の高さ
浄土への道
借金と念仏
サシミ念仏
一に一たす二
偏依法然
あとがき

発行人 法然上人鑽仰会
発行所 大 道 社

仏教保育テスト

め ぐ み

指導 大正大学教授 文博 竹中 信常
画 井上 与志夫/荻原 弘志/野沢 知且
B5版・48ページ 定価 100円・千40円

目 次

おやくそく
はなまつり
こいのぼり
おほぼん
おひがん
じょうどうえ
ねはんえ
ひなまつり
みおしえ
保育テスト

みほとけの三つのおしえ「三法印」を
美しい絵と さわやかな歌とを通じて
えがきだした待望の仏教保育書

発行所 東京都千代田区
飯田町1の21

大 道 社

TEL <332> 5944
振替 東京 8247

浄土

七 月 号



とにもかくにも悪をしのび
て、念仏の功をつむべき
也。

法然上人御法語

—◇目 次◇—

表紙 東大寺大仏殿前・八角灯籠浮彫天人像

極楽（アミタ経より）	（2）
地獄・極楽	宮 林 昭 彦（4）
地獄極楽について	高 橋 信 道（8）
孟蘭盆のインド起源の意味について	春 日 井 真 也（12）
お 盆	宮 林 昭 彦（18）
表紙説明	（17）
童話 ジョンと子供	浅 井 善 城（20）
近代 高僧伝 望月信亨	大 橋 俊 雄（26）
御法語をいただく	（25）
三部経の再発見（六）	須 藤 隆 仙（28）
編集後記	（33）

地獄・極樂

極樂

——阿彌陀經より——

かように、わたくしは聞いた。
あるとき、お釈迦さまがコーサラ国の首府、舎衛城の祇園精舎に御滞在中のことであつた。そこには、おおくの優れたお弟子たちが、会座につらなつていた。ときに、お釈迦さまは、長老の舍利弗に対して、かようにお説きになられた。

これより西の方、十万億の仏の国をすぎて世界がある。極樂という。その国にみ仏ましまして阿彌陀仏と申しあげる。いま、現に御説法中である。舍利弗よ、かの国を何故に極樂と名づくるかという、その国の人々はいかなる苦しみもしらず、ただもろもろの樂しみを受けているからである。

また、舍利弗よ、極樂には、七重にめぐらした玉垣や、七重にたれさげたかざり網や、七重に植えた並樹があつて、みな四つの宝によつて作られている。この故に極樂というのである。

また、舍利弗よ、極樂には、七つの宝より成つてゐる池があり、その中には、八つの功德のある水が充ち満ちてゐる。池の底は純金で布きつめてある。その四方には、金、銀、瑠璃、玻璃をくみ合せて成つた階段があり、うつくしき樓閣につらなつてゐる。その樓閣もまた、金、銀、瑠璃、玻璃、赤珠、瑪瑙で飾られてゐる。池の中には車輪のような大いなる蓮華が咲き競つてゐる。そして花々は、青色は青の光を、黄色は黄の光を、赤色は赤の光を、白色は白の光をそれぞれはなつて、清く馥郁たる香りをただよわせてゐる。

また、舍利弗よ、かの国では常に天には妙なる音楽が鳴りわたり、地には黄金色に照り映えて、昼夜六たび、天の曼陀羅華が光かがやきながら降ってくる。人々は、朝まだき、華血に、かぐわしき色とりどりの花を盛り、あらゆるみ仏のみ國に遊んで、かずしれぬみ仏を供養する。還り来たりて食事を取り、しずかに行道をするのである。舍利弗よ、極樂には、かような功德莊嚴が成就せられてゐるのである。

また次に、舍利弗よ、かの国には、種々の珍しい色とりどりの鳥がゐる。白鶴、孔雀、鸚鵡、舍利、迦陵頻伽、共命之鳥などが、それである。これらの鳥は、昼夜六たび、みやびやかな音色を出して鳴くが、それがそのまま、五根、五力、七菩提分、八聖道分というような、さとりの徳や力や、さとりに至る道を宣べつたえてゐるのである。聞く人々は、みな、み仏を念じ、みおしえを行じ、眞實の道をもとめて人々の和合にいそしんでゐる。舍利弗よ、これ等の鳥は、罪の報いで現れたのではない。かのみ國には、地獄、餓鬼、畜生の三惡道がないのはもとより三惡道という名まえすらないのである。これらの鳥はみな、阿彌陀仏が、その御說法を宣べつたえしめんが爲に、かりに現れたものである。舍利弗よ、

地獄・極楽

宮林昭彦

(大正大学助教授)

かのみ国には、そよ風が宝の樹々や宝の飾り網にふきわたり、えもいわれぬいみじき音を出す。百千のすぐれた樂を合奏するかのようである。この風の音を聞く者は、また、おのずからに仏を念じ、法をまもり、和合して道を修めている人々をおもう心を起すのである。舍利弗よ、極楽には、かような功德莊嚴が成就せられているのである。

舍利弗よ、汝はいかに思うか。かのみ仏をば、何故に阿弥陀仏と申すのであろうか。舍利弗よ、かのみ仏の光明は、十方の国々を限りなく照らし、何ものにも礙げられない。この故に、阿弥陀仏と申しあげるのである。また、舍利弗よ、かのみ仏の寿命およびその国の人々の寿命も限りがない。この故に阿弥陀仏と申しあげるのである。舍利弗よ、阿弥陀仏がみ仏となられてから、今に十劫というおもしろい計ることでもできない久しい時を経ている。また、舍利弗よ、かのみ仏のみもとには、かず多くの羅漢や、菩薩も住んでいられる。舍利弗よ、かのみ国にはこうした功德莊嚴が成就せられている。

また、舍利弗よ、極楽国土に生れる人々は、不退転の位に入り、必ずみ仏となるべき菩薩の最高位に登るのであって、その数も算えうるところでない。舍利弗よ、このことを聞く者は、かの国に生れんと願うべきである。何故なれば、こうした諸々の聖者と共に暮すことができるからである。と。

現代人には、地獄、極楽といえば、お伽話のたぐいか、あるいは空想的な物語としてうけとられる場合がおおい。しかしよくよく考えてみると、この地獄極楽の問題は、私たちが限りある人生をおもひ、人生の帰趣をみつめるとき

に、当然ひつかかってくるものである。

この問題は、ほり下げればほり下げるほどいくたの問題がおきてくるが、まず二つに分けて考えることができる。一には地獄、極楽はあるか、ないか。二には、もしあるとしたら、どういうところか。

いまこの問題を吟味するまえに、あらかじめ断っておくことは、地獄、極楽は仏教特有のものであるが、それに相当したもの、あるいは類似したものは、諸宗教や諸民族に共通するということである。たとえば、キリスト教の天国と地獄や、神道の高天原と常闇国などがそれである。しかし、いまここでは、仏教のとく地獄、極楽について述べてみよう。

地獄、極楽は存在しない、とするものは古今東西すくなくない。もっとも、地獄、極楽を否定する場合に同じ立場から主張されるものではなく、結論的には同じでも、その立場はさまざまである。

まづ第一に経験的な立場から、よくいわれるように「地獄、極楽など誰ひとり実際にみてきたものがないから」というのである。

つぎに第二には現在の生活に中点をおいて、過去や未来を問題にしない立場である。孔子は「いまだ生をしらず、

いづくんぞ死をしらんや」といい、徹底して現世主義をといた。孔子のおしえに流れをくむ儒学は、一般に未来に属する地獄の存在を否定したのである。わが国でも、とくに徳川時代には、儒学を官学として、これをすすめたので、地獄、極楽を否定するものが、むしろ識者であるかのようにかんがえられた。

三には、唯物科学的立場から、地獄、極楽をみとめない立場である。唯物思想は、神や靈魂の存在を認めない。もちろん、神や靈魂と地獄極楽の問題とは同一でないが、しかし、「永遠の生命」ということで、この両者は一つに結びつくのである。永遠生命を条件とすることによって、はじめて成立する神や靈魂の存在であるとともに、地獄極楽の存在だからである。

現代は科学時代といわれるほど科学万能の時代であり、非科学的として、地獄、極楽があつかわれるのである。

二

以上、ここにあげた三つの立場をみると、いずれも、地獄、極楽を死後の存在と限定してそれぞれ否定しているのである。つまり、かれらがひとしく地獄極楽の存在を認めないのは、死後の生活を認めない立場からである。

だが、地獄極楽は死後の存在と限定するのは、果して正しい、唯一の動かすべからざる見方であろうか。いいかえると、地獄、極楽は死後の生活以外に存在しないのであるうか。

もちろん、仏教でいうところの地獄、極楽は、原則的には死後の存在ということになっている。しかし、それは、現世を中心として、死後の生活を規定する場合の説きかたなのであって、地獄、極楽それ自体は本来固定的なものではないのだから、死後はいうまでもなく、過去、現在、未来の三世にわたって、その存在を考えることに、なんの不合理もないのである。だから、地獄からこの世に浮びあがったともいわれる。あるいは、いったん往生した者が衆生を救うために、再び人間のすがたをとって、この世に還相するともいわれる。こうしたことは、前世における地獄、極楽の存在を条件としなくては、いえることではない。

仏教でいうところの地獄、極楽は来世にかぎるわけではなく、過去、現在、未来の三世をつらぬく存在なのである。というよりも、時間をこえ、空間のそとなる存在なのである。それゆえに、過去にも存在し、現在にも存在し、未来にも存在するということになる。

しかし、仏教本来の立場からいうと、地獄極楽は、「有

でもなく「無」でもない。ひとり地獄、極楽にかぎらず、有、無の二見をこえた中道の正見をもってするのが、仏教の基本的立場である。したがって、地獄、極楽は、無批判に有るとか、無いとか決めてかかれるものではない。では、地獄へおちるとか極楽へうまれるとか、というのはどういう意味であろうか。

もっともな疑問であるが、有でも無でもない地獄、極楽をして現実に具体的存在とするのは、ほかならない因縁による、業のはたらきによるのである。業とは、われわれが、日常、心におもひ、口にかたり、身におこなうところの行為の全部のことであり、これが因となり、いろいろの条件がかさなつて、必然に果を生ずるのである。たとえ、時代がいくらかわつても、この法則はかわりが無い。人情がうすくなり人間が道理にくらくなつたといわれても、大自然の摂理は変ることがない。大地に野菜の種を蒔けば、野菜がみえる。花の種を蒔けば、美しい花をいっぱい咲かせる。因縁果必然の理法に変わりはない。

「前世の因を知らんと欲すれば、現世に受くるところのもの、即ちこれなり。来世の果を知らんと欲すれば、現世になすところのもの、即ちこれなり」

とあるように、生をへだて、わすれはてた前世の業因もお

のずと反省させられ、いまだ経験しない来世の果報も、おのずからおもわれるのである。みずからの悪業が地獄をつくり、みずからの善業が極楽を感ずるのである。

三

ところで、地獄についてみると、捺落迦、泥囉夜の訳で、「自らの悪業によって、衆生が趣入すべき地下の牢獄」として經典には、戦慄をおぼえるような地獄のさまざまのすがたがえがかれてゐる。源信(恵心)僧都の往生要集には、地獄、極楽の種となる様相を明かにしている。

まず地獄を八つにわけてゐる。等活地獄は、閻浮提の下一千間句にあつて、広さ一万間句であるとしている。ここでは、罪人がたがいにも害心を抱いており、会うと獵人が鹿に逢つたように、たがいに鉄爪でかみさくのである。血や肉はすでに尽きてしまつて、ただ骨がのこつてゐるだけであるが、その上にまだ、獄卒が鉄杖や鉄棒で全身をあますところなくうちくだき、刀でズタ／＼に肉を割りさくのである。

黒繩地獄は、等活地獄の下にある。獄卒は、罪人を熱鉄の地におさえつけて、熱鉄の繩をもつて縦横に身を墨打ちにする。つぎに獄卒は、その身を黒繩にしたがつて、熱鉄

の斧で切り割り、あるいは鋸や刀で切りはなち、百千の切りはしにして置き、罪人をそのなかに入らせ、悪風がはげしく吹いて、その身にからまり、肉はやけ、骨は焦げはててしまふのである。

衆合地獄は、黒繩地獄の下にあつて、おおくの鉄山が両側にそそりたつてゐる。この間を、牛頭、馬頭などの獄卒が手に手にせめ道具をもつて罪人をおいてたてる。すると、両側の山がせまつて罪人の身体ははさまれて、くだけやぶれて、血は地にみちるほどになる。

叫喚地獄では、獄卒の頭は黄色く金のようにあり、眼からは火がでてゐる。口に悪声を発して罪人を射ると、罪人はおそれおののいて頭をたたいて救いをもとめるが、獄卒は、いよ／＼怒りを増して、鉄棒で頭を打つて熱鉄の地を走らせたり、熱した釜にかけてにたりする。

このように、大叫喚地獄、焦熱地獄、大焦熱地獄、阿鼻地獄のいづれをみても、およそわれ／＼の想像に絶する大きな苦しみをうけるさまが縷々と説かれてゐる。

では、どうすれば地獄に落ちるかという、仏教では、五戒のなかでも、殺生戒をおかすと、たちまち地獄行きであると教える。

最後に一言すると、この地獄に対して、極楽はどのような存在するのであろうか。阿弥陀經のなかには、極楽は仏の国土であり、衆生がそこにいく場所であるとしている。すると、極楽は、かならず人間との対応関係において存在するものであり、極楽は衆生がそこにいく場所である、とするのが重要なことであらう。極楽について、唯心の淨土、すなわち心のうちに淨土があるとすると、十萬億土に淨土があるとすると、二つのみ方があるが、そのいずれにせよ、まず極楽は、どうしても存在するものであることを、もう一度考えることが必要であらう。それは、地獄にえがかれている苦の相以上に、現代は文化が発達すればするほど、交通地獄、殺傷地獄、火災地獄、登山地獄、それに享樂地獄の世界が現出している。

人間の生活する場と、その心の中にやどる地獄絵さながらのみにくさを思うとき、極楽の実在をおもわずにはいられない。

大正大学教授
文学博士 佐藤密雄 著

原始仏教教団の研究

発行所

山喜房仏書林

申込先

東京都豊島区西巣鴨四丁目
大正大学仏教学研究室

A 5
八 九 七
冊 三、〇〇〇 頁 版
送 一、二〇〇 円

大法輪閣刊

東京・渋谷・上通

振替／東京一九

真野正順 著

B 6
上製本
予価四八〇円

無量寿經講話

地獄・極楽について

高橋信道

〔群馬県太田市入町教授院住職
同太田市立太田養護学校教諭〕

絵で見た地獄・極楽

寺に生れた私は、物心ついた頃、何かのはずみで、本箱の中にあった赤い表紙の和綴の本を開いて驚いた。その本の中には絵が入っていて恐ろしい地獄の姿が次々と書かれていた。文字は読めなかったが、その絵は恐ろしい地獄の絵で、閻魔の庁や血の池地獄や針の山が画かれてあった。

子供心にもその有様が余りにも恐ろしく、直ぐ本を閉じるのであったが、こわいもの見たさで、時に出しては、のぞき見たものであった。あとになって考えて見ると、それは恵心僧都の往生要集であった。そして、子供心にも、生き物を殺すと畜生道に落ちるとか、嘘をいうと舌を抜かれるというような事をあの恐ろしい絵を通じてマザンと感じたことである。段々成長するにつれ、あれは譬えばなして空事だと勝手にきめて、いつともなく忘れてしまっ

た。

現実に見た地獄図絵

さて、話はあの戦争中に戻るが、私は三十五才で妻子四人を残して召集され、高射砲部隊に入り、京浜警備ということで東京湾内の埋立地に陣地があつて、昭和十七年から終戦まで三年間そこにいた。

あの空襲で再び幼ない頃の記憶がハッキリ蘇がえり、往生要集に画かれている六道が、実は現実私の目の前にある事を体験した。それは決して絵空事ではなく、この目で、この皮膚で感じとった地獄図であつた。修羅道とは当にこれをいうのであろう。死骸が畳々と横たわる街、火焰中で親を求め、子を探して泣き叫ぶ人間の姿こそ、正しくの地獄そのものであった。更には、終戦後の食糧難による餓鬼道の姿も私もふくめて、戦争を体験した人々の身をもつて知った地獄図絵であつた。

今日から考えると、まるで嘘のような、夢のような感じであり、当時に比べたら、平和な今日は、極楽そのものである筈である。

此の世の裏の川原

六年前、即ち昭和三十三年三月から、それまでの教員生活の中で精神薄弱児の学級を受持つ事になった。それまでも全々気がつかないわけではなかったが精神薄弱児は百人中に二人や三人の子供なので実際には無関心に近い態度で過してしまっていたが、さて、学級を受持つとなるとそうは行かなくなってしまうた。

智慧おくれと言われている子供たちだから、やさしく、時をかけて、静かに教えてやったら……と誰しも考えるやり方で子供達に接していった。ところがである。私の考え方は余りにも甘いものであった。何を持って行っても、あざやかに撥ね返されてしまう。

従来胃弱の私は毎日この心労の中で、終に一ケ年半程で胃病が重くなり手術をして、胃の三分の二を切除する始末であった。そして、入院中も退院後もこの子供たちの救いについて考え続けた。そしてここに又、現実の世の中に、子供の世界の中にも賽の川原を見たのである。

「これはこの世の事ならず……」に始まる、あの地蔵和讃が頭に浮んできたのである。

遠い夢物語り、坊さんの作りごと、と感じていた賽の川原が実在する事を知ったのである。

「これは此の世の事ならず……」ではなくて、「これは

この世と異ならず……」と感じるようになった。毎日毎日塔を積んでは崩し、積んでは崩している子供。又積み積めと責めたてる鬼―馬鹿だ、馬鹿だと嘲笑する無責任な社会の人々―

夜毎夜毎に子供の成長を眺めて喜びと夢と希望をもって、微笑んで眠る母親に対して、終日終夜子の将来を思っている母親を涙して見守る母親。不慙で不慙でたまらない気持といっそ死んで呉れたらと思う苦しい気持を抱き続けている母親父親も勿論であるが―この親の心中察するに余りあるものがある。

この子たち、又この親たち、に救いはないのか。

賽の川原の地蔵尊

「この時能化の地蔵尊、ゆるぎ出てさせ給いつつ……」と地蔵和讃にはある。さしずめこの地蔵菩薩はこの学級の教師である私であった。「抱きかかえて撫でさす……哀れみ給うぞ有難き」……その有難い存在こそ私が勤めなければならぬ役割であった。

私は毎朝本尊様に、「今日一日この子たちに大悲を注ぐことが出来ます様に、私を地蔵菩薩として許し給え、力をかし給え」と祈りつつ登校した。

今まで口で読んだお経は、体で読まなければならない。
衆生済度などと気安くいうが、一人の精薄兒、一人の母親
を救うことが、如何に大変なことであるかをシミジミ知っ
た。

そして、千手観音の千本の手も、十一面観音の十一のお
顔もこれこそ弥陀大悲の愛の表現で、芸術上の誇大表現
でない事を、本当にさとした。

体で読む四誓偈、皮膚で称える念仏

小僧の頃から一番親しんできた四誓偈も、さて、体で読
むとなると大変なことだ。

「開彼智慧眼、滅此昏盲暗」、と暗誦している一句を、
この智慧後れの子供に当てて、生きる智慧を、この昏盲の
暗を減することの如何に難中の難事であることが。

法然上人の一枚記請文の

「愚鈍の身になして尼入道の無知の輩に同じうして」、
の愚鈍の身になすことも、無知の輩に同じうすることも、
我身我が体で実現しなければならぬ。

頭で理解している、わかっているということ、本当に
それを体で実行する事とは大変な差異がある。

私は毎日迷っている。然し如何に難中転更難であろうと
も大悲を仰ぎ慈悲を戴いて前進せねばならない。その為
も宗祖上人の

「往生極楽のためには……只一向に念仏すべし」の御遺
訓を実践せざるを得ない。

南無阿弥陀仏

マリノフスキー著
藤井正雄訳

A5版上製 価八〇〇円
二七六頁 T一〇〇円

文化変化の動態

アフリカにおける
人種関係の研究

理想社刊

申込先

東京都豊島区西巣鴨四丁目
大正大学宗教教学研究室

孟蘭盆の

インド起源の意味について

春日井 真也

(一)

五年ほど前のことである。日本ではじめて第九回国際宗教史学会が開かれたことがあった。その会議の総裁は三笠宮殿下であった。そして三笠宮は挨拶のうちに次の様なことを云われた。

日本の個々の宗教に於ける信仰の対象である「カミ」が、便宜上 God と英訳されていすけれども、実際は日本の「カミ」は God とは全く異った性格を備えています。一方、日本の信仰の対象は「ホトケ」であります。仏教は外国から日本に伝えられたものですから「ホトケ」は本来は「カミ」とは全く違った性格を備えていたはずであります。それにもかかわらず日本人は

「カミホトケ」という言葉を用いて、そこに何等かの矛盾を感じることなく、同時に「カミ」と「ホトケ」に祈願できる人は、今日でも少くありません。その理由の一つとして、私は日本人が理論的なものより情緒的なものを好む性格をもっていることをあげたいと思います。

古人の和歌に「何ごとのおわしますかは知らねども、かたじけなきに涙こぼる」というのがあります。この和歌は作者が伊勢神宮に参拝したときに詠まれたと伝えられています。私はこの和歌に、多くの日本人のもつ宗教思想が如実に反映していると思います。

そしてこの挨拶の結びとして、三笠宮は、日本こそまさに宗教史の「生きている研

仏大教授文博 インド国立ビスバハラテ
イ大学教授として在印中

究室」であり、「生きている博物館」なのであります。したがって今回の皆様の滞日中に出来るだけの研究成果をあげられると共に、愉快な思い出をもって帰国されることをわれわれは願ってやみません。

と語られた。この国際会議には日本を含めて二十六ヶ国六百名の学者が参加したのであるが、実は私もこの国際宗教史学会には日本からではなく、インド側の代表の一人として参加した。その時期は八月―九月の間であったから、暑さこそしのぎやすくなったとは云うものの、すでにお盆の時期をすごしてしまっていたから、会議に附随していた研究旅行に於ては、何処に於ても、お盆の行事を見学することは出来ませんでした。

インドに起源して、近代シナに於て特別な

發展をもつ、お盆の行事は、古く日本にも伝えられて、今になお行われている法会のうちに、如何なる意味があり、如何なる事情があるのかを見とけることは、比較宗教学や文化史研究の上の大きな課題であつたのであるけれども、終にその機会は得られなかつた。

今年もまたお盆の月がまわつて来ました。この機会にお盆のことを考えて見たいと思います。

ずい分昔から、日本でもお盆の行事が行われています。しかもそれはインドに起源するものでありますから、インド人、シナ人、日本人というそれぞれの人間的な相異によつて次第に形を変えて来ていることは事実であります。そこで今の場合、先づインドのことから考えて見ましょう。

(二)

初期の仏教文献を注意し読んでみると、仏陀とお弟子たちとの間にゆききしたうるわしい人間愛の交流について、私は心をうたれるのです。仏陀は愛の人であり、また涙の人でありました。従つて生きた社会の本の

悩みの根を見出す叡智をもつて居られたわけであり、そこから仏陀の正しい人間救済と社会教化が生れて来たのであります。

仏陀の御一代の行化には、常に王舎城の靈鷲山のときには三万二千人のお弟子が居つたとか、舍衛国の祇園精舎のお説法のときには千二百五十人のお弟子がいたとかいふ様な表現で記されています。これらのことは、インドの雨期の三ヶ月を、そのころに生き生きとした活動期に入る小さな虫や草木などを損うことの無い様にといい思いやりからと、また

実は雨にぬれることは人間の身体には良くないという様な経験的な事実の上から、インドの宗教では、この三ヶ月を一ヶ所に宿住して自身の修養のために動かずに過ごされた時のことであつた。祇園精舎などは、仏陀行化の四十五年のうち二十五回も雨安居のために宿住して居られるところであるから、仏教のインド文化史上の意義を考へる場合に、最も重要な地点となる。

また仏陀のお弟子を五比丘とか十大弟子とか十六羅漢とか云う数え方をする。そのうち五比丘というのは仏陀の修行時代をともにし

た五人の人たち、憍陳如、跋波、跋提那、摩訶那摩、阿説示のことである。彼等の帰仏の状況を伝える物語がバリー語の南伝律や漢字訳の律典の中に記されていて、仏陀の覺者としての自信と、この五比丘を悟らせられる慈愛が頑な固執を開いてゆくありさまが、まのあたり見る様に書かれている。

十大弟子の場合でも十六大弟子の場合でも舍利弗、目連、迦葉という具合に数えることが普通になっています。このはじめの舍利弗尊者と目連尊者のお二人は仏陀の御入滅に先立つてなくなつていたのであるが、そこにもうるわしい師弟の愛情が見られる。

迦葉尊者は三人兄弟であつて、ともに事火外道という拝火宗教を信じ、頭上に螺の形をした髻をむすんでいたと云われる。非常に有力な宗教家で長兄ウルビルバー・カーシヤバは五百人、中兄ガヤー・カーシヤバは三百人、末弟ナディ・カーシヤバは二百人の弟子をつれていたのであるが、祭火の器具を河に投じて、その眷族一切を引きつれて仏陀に帰依したといわれています。

目連尊者は王舎城から遠くないところに生

れ、幼い時から舍利弗尊者と親友であつた。

そして二人とも、当時マガダ国で有力であつた反正統派バラモン教の指導者の一人であるサンデヤヤのお弟子となつて居て、二百五十人のお弟子をあずかつて居られた。師匠のサンデヤヤの教説はアマラー・ヴィケーパといわれていて、アマラーは鰻のこと、ヴィケーパとはヌラヌラして捕え難いことを意味していることなどから、彼の答は鰻のような真意を捕捉し難いヌラヌラした詭辯論を用いたんであつたことを意味している様であります。舍利弗尊者は、五比丘の一人である阿説示比丘に出遭つて、諸法因縁生の偈文を聞いて目連尊者とともに來つて法を聞き、仏陀の教説の明快性におどろいた彼等二人は、サンデヤヤの捕へどころのない詭辯論に迷わされていたところから一度に目覚めて、弟子たちと共に帰仏するのである。

この二つの場合のお弟子たちの数が、前の一千人とあとの二百五十人とを併せると一千二百五十人となるわけであつて、仏陀のお弟子の数を云う場合の標準語となつたわけでありませんが、このことは仏陀は当時の最も有力

な宗教家たちの上に立たれたことを表示しているものと考えることができるのであります。

(三)

この舍利弗尊者と目連尊者は決して空想的な人間ではなくて、西紀前第三世紀頃の構築になるサーンチの大塔に近いサトダーラの第二スツーパーには、現実に、舍利弗と目連の舍利が収められていたのである。今から約一〇〇

〇年前イギリスの考古学者ダンニンガムによつて発掘されたとき、そこから出た二つの舍利壺の一つには、ブラフミー文字のブラグリット語でサーリブタサと書かれて居り、他の一つはマハモーガラナサと彫られてあります。そしてそれらは十年程前に新しくサーンチに建てられたヴィハーラの中にネール首相の手によつて納められたのであります。

これらの仏弟子たちのうちの目連尊者にちなむお話である。目連尊者は数多い仏弟子たちの中では神通第一と云われ、事実、彼は屢々地獄、餓鬼などの世界に神通を用いて遊ぶことがあつた。いろいろの種類の餓鬼が彼に苦しみを訴えたのであつた。

「目連尊者の母はなくなつたあと、マイチカという世界に生れ代つて、ブハドラ・カニヤーと呼ばれていた。目連尊者が或るとき、その世界に神通で入ると、ブハドラ・カニヤーは目連尊者を見て、『我が子よ』と呼んだ」という話が、アバダーナの中に見えている。こういうところから孟蘭盆経が説き出されたものであろうか。

孟蘭盆経の要旨は次の如くである。

「仏陀が舍衛国の祇園精舎に居られた時のことである。目連尊者は父母乳哺の恩を報じたく思つて、そこで神通を以て探すのである。そうすると、目連尊者は、なつかしい亡母が餓鬼の中に生れ、飲食を得ず皮骨連立するさまを、まざまざと見たのである。目連尊者は哀しみにたえず、自ら地獄に趣いて、鉢に飯を盛つて母に奉つた。母は左手で鉢をもつて、右手につかんでたべようと、口に運ぶと、忽ちそれは燃える炎火となつて、口に入らぬものとなるという状態であつたという。それで仏陀に救済の道をたずねることになる。そうして七月十五日丁度雨安居の終つた日、十方衆僧に百味飲

食を供養し、七世父母および現在父母のため厄難なからしめることの出来る方法を教えられた。」

というのである。

ここでは父母のうちの母が出てくるのであるが、どうしたことか父のことは出てこない。インド人は古くから母を大切にしてい、今日に於てもよく用いられる言葉である「母なる大地」というのは、古く西紀前第二世紀には成立していたと云われるマヌ法典に出る言葉である。そしてまたこの本には、この時代にすでにインドでは「婦女は田畑であり、男性は種子である」という言葉が用いられていたと引用している。

この盂蘭盆経はシナではよく読まれたらしく現存する註疏が二十一種類もある。そしてこの経の趣旨は、祖先崇拜と孝道とを重んずるアジアの社会の感情と一致したものである。特別な意味をもつことになったのである。

(四)

この盂蘭盆経は漢字に訳された大蔵経の中には、二種の伝本がのこっているが、チベッ

ト大蔵経の中にもバリー南伝大蔵経の中にも見出せない。この盂蘭盆経はもとのサンスクリット語の場合には「オーランパー・ストラ」と云ったようである。「オーランパ」とはビシャーチーという餓鬼の一種である。ここでは女性餓鬼であるからビシャーチニーと云われるべきものである。このビシャーチーとかビシャーチニーのもとになるビシャーチヤという餓鬼はインドでは極めて古い時代の文献にも早くも見えている名である。

インドの習慣で云えば、如何に富み栄えている人でも宗教儀式には大がかりなことを望んではならないとされる。そして祖霊祭の場合には三人までのバラモンを供養すべきであり、このときの供養は朋友、親戚と共に一緒に食べるべきものであると規定せられる。そしてこの場合、常人の眼には見えないが、ビシャーチヤ餓鬼が現われて来て一緒に食事していると信ぜられている。またバラモンを一人しか呼ばない場合には学者を呼んで供養すべきであるという。そうすれば豊かな果報を獲得することが出来ると云われている。

このことは現在でもインドで行われている

わけである。そこでは特定の祖霊祭の日はない。しかし大体秋に各家庭で行われる。

実際の暦の上が云えば、バイシャクの満月が仏陀の成道の日となっていて、これのあと六十日たつと、初転法輪というのがある。雨安居のはじめの日である。この日も満月にあたるから、一般信者は仏教教団に沢山のお供養をする。そのあと三カ月間が雨安居であって、その明けの日が盂蘭盆経に説かれている日に当るわけである。それであるからインドではこのごろ仏教徒もヒンズー教徒も同じ様に、共同飲食の型式で祖霊祭をしていることになるわけである。

(五)

このことはシナに伝えられて、本来は別々のものであった盂蘭盆と施餓鬼と中元とが一緒になって、現在見られる様な形をとるに至ったものと考えることができる。

盂蘭盆は目連尊者の故事にちなんで十方衆僧を供養する日であり、施餓鬼は餓鬼道の苦難に墮ちているものに淨食を施して救済することが中心となり、併せて三界万靈に飲食を

施与する儀式であった。これに比べると中元

はインドとは全く無関係のものであり、シナの道教思想に於て地官大帝が罪業を赦してくれる日であった。シナの道教はこれらをすべて一緒にして仕舞っている。道教では出家道士を志願した道童が最初に覚えなくてはならない經典の一つに「口経」というのがある。また北京の白雲觀という道教の大本山の祭祀行事で云えば、四月五日、七月十五日、十月一日、十二月二十七日の年四回が「口」という祭日である。これは夜中、人が寝静まった時刻に齋堂に於て壇を設けて祭祀するのである。この夜中という時刻は、元來密教の施祇鬼法に規定した時間である。この「口」という表現そのものが、極めて目連尊者の母の苦しみの場合と類似している。

近代シナの作教で盛に行われる水陸勝会という法会は、また一種の施餓鬼法であって、道教の「口」と極めて類似している。

(六)

ところで日本で行われる盂蘭盆の行事はシナで道教的事象をとる以前の形のものが伝え

られていることになる。

盂蘭盆の行事が日本で行われたものとして推古天皇の十四年（西紀六〇六年）の記事から考へるべきであろう。この時は、「この年より初めて寺毎に四月八日、七月十五日に設けしむ」というのである。四月八日は仏陀誕生日であり、七月十五日はお盆の日であって、この両日に設け即ちお供養による共同飲食の行事が行われたというわけである。それはここでは表面上の意識としては浮び上つては居らないけれども、インドの祖靈祭の場合の共同飲食という形が立てられたことになる。このうち斉明天皇三年（西紀六五七年）には「盂蘭盆会を設く」という記事が見られる。その場所は飛鳥の寺の西で行われたらしい。更に天平五年（西紀七三三年）、七月には「始めて大膳に会して盂蘭盆供養を備えしむ」と見えていて、この記事は七月六日のものであるから、命ぜられた大膳は九日間を準備にかけて、十五日にはじめて供養をいとなんだことになる。この様な形になるまで、はじめの記事からすでに百年以上の月日がたっている。しかもこの間の仏教と中央政治との関係

には、行基菩薩とその弟子たちによる宗教運動などがあり、決して国内平安の日がつづいたわけではない。はじめに三笠宮殿下の挨拶の文章を引いた理由も、ここにあるわけである。日本人の宗教心が、もしその言葉を用いるなら「情緒的」でなかったとしたならばすでに奈良朝時代の政治が全く異った形となっていたであろう。しかし日本の長い歴史の中に、たとえば舎人親王の宗教統制政策の如き、極めて勝れた「理論的」な政策も見られないわけではない。まこと日本の文化は「生きている宗教史の研究室であり博物館である」ということは事実であります。インドに起源する盂蘭盆の行事が、広く日本の民間の行事となり、今日になお行われているところに、古くして尚且つ新しいインドの文化の生きた姿を見る思いがするわけであり、こういう事実を通じひろく人間の共同のいとなみが可能であるという思いがするのであります。そしてこのことが人類の永遠の理想である平和の生活というものがあるか否かというものが如何な立場で生み出されねばならぬかを考えさせるひとつの形を示していることになりました。

表紙の写真

東大寺大仏殿前八角燈籠浮彫天人像

東大寺の大仏殿に足を運ぶたびに、多くの人が八角燈籠の欄に背をもたせて、大仏殿の方を見やり、写真にうつつをぬかしているのを見て、感無量になるのを覚えるのである。

大仏様の大きさに圧倒されるのもよい。しかし、その背後には再度にわたって兵火に会い、初めの面影をしのぶすがすがすが、わずかに仏の下部と台座の蓮弁にしか残っていないことを思い出すべきであらう。それにひきかえ、天平当初の姿を残すことのできた、この八角燈籠にいちばんの愛着が感じられてくる。扉の菱形格子に伎楽（ぎかく）はさつとか、音声（おんじょう）はさつとか呼ばれる天人像の童顔がことになつかしく、私の胸中に響いてくる。青によしならの都の八重桜の咲きほこる天平の世にかなでる楽の音が、天平人の優雅さをしのばせるせいなのであらうか。

それにしても、この写真の像をことさらに楽伎はさつとは呼びたくはない。「笛吹童子」と俗称される方が、よほどびつたりした感じである。華嚴宗の総元締めであるこのお寺の

ことであれば、華嚴經の善財童子の物語りと重なる世界をもっておられるに相違ないからである。「童子」には先入観念はない。旺盛な知識欲と求道欲とが渦巻いている。誰の教えでもすなおに聞く度量をも合わせそなえている。その童子の心境を、おとなはうらやましく思い、童心に帰ることに強くあこがれもするものである。法然上人の言われる「赤子の念仏」や「生まれつきのままの念仏」や、証空上人の白木の念仏も、ともに共通しているのはその世界ではなからうか。無心に笛を吹く、その清らかな楽の音は悪鬼羅刹にも、心のふるさとを呼び起こし幼なかりし頃の童心をゆり動かされるに相違ない。天平人は大仏前に詣でて、礼拝合掌する前に、かつての童心を呼び起こし、無量の光によって照らし出し、すなおな心の状態で、仏にすべてをあずけることができる、という心にくい演出と受けとるのもすでに邪道であらうか。

音楽には国境はない。光にもさえない世界はない。燈火がともされた燈籠に浮きほりさされている笛吹童子。そこに暗示されているものは何か。今一度静かにすぎこしかたを省り

みて、この童子がうかべる微笑を見なおすべきであらう。

八角燈籠の西南面に位置するこの像は雲に乗って音楽に興じている姿ではあるが、空中に舞う天衣は微風の吹いているように軽くひるがえっている。たれ髪や額の髪のは感じは鑄造の原型が蠟型を示すものとして注目を集めている。燈籠の第一に推される貫祿は燈柱そのものにある。円と直線を上手に適合させて、重厚ななかに優雅さを合わせもち、浮彫りの像との対比もきわめてすばらしい均齊となつてあらわれている。

かつて、ここに天皇が行幸し、燈火をともして大仏に供養するに、一万五千有余の燈火がともされたともいい、二万のこともあったといい、いかに壯観であつたかがよく判る。それにしても中心のこの燈籠はどのように光り輝いたことであらう。

おほてらのほとけのかぎりひともしてよるのみゆきをまつぞゆゆしき 会津八一
おのれの愚かさを、笛吹き童子の心に託して、天平人のおおらかさを歌おうとすること自体、大きな誤りであつたのであるが。

——仏心は母をおもう心——

叱られたことも恋しい魂まつり

親が子を懐しみ、子が親を慕うのは、人情自然の発露であらう。時代はうつり、人間の生活様式はかわれども、人をなつかしむ情愛にはかわりが無い。お盆のみたままつりの行事

の一つ一つには、むかしより今日にいたる、私たち民族のいのちとちえがしみこんでいる。

お盆が近づくと、子供たちの「みたままつり」の可愛いうたこえが聞えてくる。

みどり色こき 清きこの宵

わが亡き人の みたまよ来ませ

みほとけ迎え みめぐみ仰がん

わが家の栄え たらちねの幸

ともしび清く みたまをまつり

みほとけ迎え みめぐみ仰がん

このうたには、おぼんの風情と精霊まつりの意味がよくあ

お盆

らわれている。

人が亡くなってしまったが最後、もうそれっきりで、すべておしまいだというのは、まことに悲しいことであり、淋しいきわみである。ある時代には、私たちと同じように、生活をもち、家族となごみながら、精いっぱい働きつづけた人が、亡くなると、紙くずのように捨てられ、やがて遠くにおしやってしまうことは、しのびがたいことであり、人間の

情愛として、ゆるせるものではない。

姿かたちこそみえないが、声こそ聞えないが、まごころこめてお迎えすれば、供養に応じてきて下さる「亡き人」の存在を信じなければおられない心を、じつはお互に生きている人間が、だれしもがもっている

のである。

亡き人のいますぐ如き魂まつり

平生は、仕事や生活におわれ、こうした純真な心には、なりがたいのであるが、お盆がきて、迎え火をたき、香のけむりゆらぐ仏壇に両手を合わせて、心しずかに故人を偲んでみると、そのことがしみじみと感じられる。

とくに、社会が、めまぐるしく、はげしく変転する、現代の生活において、お釈迦さまがおられた時代のように、み教

えを、そのまま、すなおに、おこなうことはなかなか困難である。末法といわれるゆえんである。

この末法、すなわち現代をめあてに、そのむかし悩みおおき恵まれないものを救うためにおちかい（誓願）を立てられ、そのちがいが成就して、現に在しまして、世の中のすべての人びとを救っておられるみ仏に、あみだ仏（阿弥陀仏）がおられる。お経には

心からあみださまを念ずるひとは、永久の生命をえて淨土に生まれ、み光に遇うものは、身も心もやわらいで苦惱が自然に除かれる。真実と調和とのよろこびにみちあふれ、悪をすて、善におもむき、おのずから自他を完うすることが出来る。この人を人中の白蓮華といい、もろ／＼の菩薩は、勝友となる。

としめされているが、これは、たいへん意味ぶかいことである。私たちが、み仏に帰依し、なむあみだ仏を唱えて、この身のままおまかせするとき、すべての罪とがはのぞかれ、お釈迦さまも、宇宙にみちみちている仏さまも、さらに、わが家の祖先も、いまは亡きすべての人びとが、みなともに、永遠の仏となって障りおおい社会に生きる、この私を、おまもり下され心安らかに生活できるというのである。そればかりでなく、自分だけが生きるのだという、わがまま

がうち破られ、すべての人たちによって生かされているという自覚におのずからたちかえてくる、というのである。

それは、ちょうど母の胸にいだかれて、なんの不安もなく、無心にやすらぐ赤ん坊のすがたである。

遠いむかしより、おぼんのまつりが、年々歳々うけつがれておこなわれてきたのは、いがみあうせまい人と人とのころを豊かにかよいあわせ、社会と人とのありかたを、あたたかい人情自然のあらわれのなかに、くみしてきたにほかならない。

お盆のおまつりの仕方、地方によってかわった風習もあるが、お盆の十三日の宵、ちょうちに火をてんじて、家族全員でお精霊さまをおむかえしている人たちにであったことあがる。時代はうつってもみ仏を迎え、なき人をまつる人情にはかわりはない。

地方から都会へでてきている人たちは、いつも故郷のことが頭にある。ふるさとへ通じる汽車の発着は、なぜか郷愁をそそるものである。

「ふるさととは母のふところ」母を思う心は、仏ごころに通ずる。宗教は、人々が帰えりゆく心のふるさとである。人生があるかぎり宗教があり、宗教をはなれては、ほんとうの落ちついた生活ができないのが私たちである。

童話

ジョンと

子供



浅井善城

ジョンは赤毛色の犬です。ジョンのいる所はお寺で保育園もやっています。毎日大勢の子供が来て、とてもにぎやかです。ジョンは毎日小さい子供と一しょに仲よく遊びます。子供達のお母さんとも仲よしになって、決して吠えません。ここへは、生れてから六十日位過ぎた頃貰われて来ました。この家には女の子が一人と、男の子が二人います。お寺ですから毎朝和尚さんは仏様の前で「おつとめ」をします。かねを打って、木魚を叩いて、ぼくぼくと音をさせながらお経をあげ、お念仏をとねえます。

ジョンは自分の小屋を作って貰い、玄関の横におかれて、そこでねたり、起きたりしていますから、毎朝和尚さんのあげるお経の声や木魚の音を聞き乍ら、仏様のごはんを頂いて

大きくなりました。

和尚さんは保育園の園長さんで、奥さんは保母さんをしていいます。毎日お坊さん姿の園長さんや、保母さん、お母さん、小さい子供を見て大きくなったジョンは、お坊さんや女の人、それから、子供には吠えませんが男の大人の人やお坊さんでも背広の服を着てくる人にはものすごく吠えます。

ある日保母さん（先生）が子供のお母さん達と門の所でいろ／＼お話している時、本屋の店員さんが本を届けに来ました。そばにいたジョンはものすごく吠えて中へ入れようとしません。右へ行けば右へ、左へ行けば左へ行って、わんわんといっしょうけんめいに吠えるので、店員さんは中へ入ることが出来ませんでした。それで先生がようやく押えてやっと中へ入れたことがあります。

その時、いっしょに居たお母さん達は、びっくりするやら感心するやら、……………いつもお母さん達には吠えないので、この犬は吠えることを知らない、おとなしい犬だと思っ ていたらしいのです。それが女の人には吠えないで、男の人には吠えるので、とても感心しました。「ジョンはえらいねー男の泥捧はあるけれど、女の泥捧はないからね、感心だねー」と云ってほめるとうれしそうに尻尾をちぎれるように振ってお母さん方の顔を見ました。

大変利口な犬で一度教えたことはよく覚えています。「おすわり」「お手」「おかわり」「わん」等すぐ出来ましたし、非常にむずかしい「伏せ」も出来ました。これは園長先生が昔、軍隊にいた時、軍用犬の係りをしていたので教えたのです。軍用犬でも伏せが出来る犬は三頭ほどしかいませんでした。

朝、子供が保育園へ来る時は邪魔にならないように、玄関の前に坐って見えています。もし変な人が来ると吠えるのです。そして子供達が皆来て教室へ入っておけいこを始めると、教室の入口の前に坐って門の方をじーっと見えています。子供達とは仲よしですから、どこをさわっても怒りません。夏の暑い時は部屋の中の涼しい所で、冬の寒い時は日当りのよい暖い保育室の廊下で子供達と一緒に日なたぼっこをしています。日曜日で保育園の子供がいないう時は園長先生の子供とそして猫も一緒になって仲よく廊下で遊びます。保育園がある時には園長先生が保育室を見に行きますと仕方なしにのそりのそりと出て行きます。叱られると思っっているのでしょうか。先生方とも仲よしですが特に給食の先生とは大の仲よしです。

いつも給食のおいしいものを貰うからです。朝給食の先生



が門に入ってくると飛びついて顔をペロペロなめます。

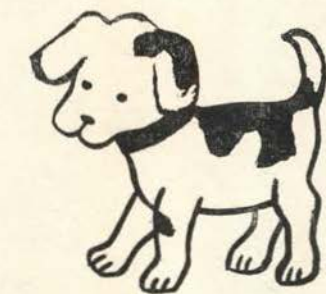
今日は先生の云いつけを守らないで門の外へ出て道路で遊んでいる子供が十人ばかりありました。するとどこかよその大きな犬がその子供達を目がけて追って来ます。子供達はこわくなって泣き乍ら園の方へ逃げて来ますけれど段々犬に追いつめられて来ました。外の子供の知らせで先生が出て来ま

したが女の先生で然も相手が大きな犬だったのでどうすることも出来ず「困った／＼どうしよう」とうろろうしていました。その時先生や子供の前を急に飛び出して行ったものがあります。ジョンでした。保育園の子供がよその犬に追いかけられているのを知ったジョンが勇敢に飛び出して行ってその犬に向いました。それで先生や子供達も元氣を出してジョンに応援しましたのでよその犬も逃げてしまいい子供達も無事に帰って来ることが出来ました。主任の保母先生はじめ皆「やれ／＼助った」と胸をなでおろし、子供達も一緒に「ジョンよ有難うジョンよ有難う」とお礼を云い乍ら頭や身体をなめました。ジョンはあ／＼と大きな息をしながら尻尾を振って子供達にこたえま

した。

ジョンが保育園へ来てから八年程たち、和尚さんの子供も小学校一年、三年、中学一年となりました。ジョンの家も大分古くなりましたのでペンキをぬってきれいにすることにしてその仕事を和尚さんの子供に云いつけました。和尚さんの子供は喜んで色をぬり小屋の屋根にジョンの家とかいてやりました。知らない人もその字をよんで「ジョン／＼」と呼ぶようになりました。

今日園長先生は朝から用事があって出かけて留守でした。ところがその日のお昼少し前頃大変なことが起りました。それは保健所から野良犬をつかまえる人が廻って来ました。丁度ジョンの首輪に「かんさつ」がついていなかったの



で、これは野良犬だといってつかまえてしまいました。子供達は「ジョンが大変だ大変だ」と言ってさざわりました。主任の先生はじめ外の先生方も大急ぎで出て来ていろいろ話をして「犬を返してくれ」と云って頼みましたがききません、可愛想にジョンは針金の輪で首をしめられてあみのついたかごの中に入れられてしまいました。子供達は「犬とりの馬鹿、ジョンを返せ」と口々に云い乍らあとを追いかけてきたが車には追いつきません、先生のまわりに集つ

て「先生ジョンが可愛想だ」「ジョンはどうなるの」「早く取り戻しに行こう」といいました。先生もどうしたらよいかわからずに困ってしまい、子供達と一緒に心配していました。その時「園長先生いないの？どこへ行った？園長先生に話したら」と云ったので主任の先生も「そうだ／＼」とや

と気がついてすぐ園長先生の行っている所へ電話をかけました。電話をうけた園長先生はすぐ自動車で保健所へ行きお金を払って「かんさつ」を貰い注射もうけてジョンを貰って園へつれて来ました。

丁度園のおけいこが終って子供達が帰る四時頃だったので「わーっジョンが帰ってきたジョンよかったねジョンよかったね」といってみんなでジョンを取りかこんで喜びました。ジョンも本当にうれしそうでした。

保育園は夏休みの頃になると子供達は半分位になります。それは学校が夏休みになると兄さんや姉さんが家にいるようになるので一緒に休みするからです。

長い間子供達と仲よく遊んで来たジョンにもとう／＼悲しい日がやって来ました。がそれはだれも知らず又気がつかず、わからなかったのです。毎朝園長先生が起きて玄関をあ

けるとすぐ飛びついて来て門をあける所までついて行きます。どこか遠くへ遊びに行ってる時でも門をあけて仏様の前でおつとめをしていると、そのかねの音や木魚の音をきくとちやーんと帰って来ます。それがその日に限って園長先生が玄関をあけても飛びついて来ないし、門をあけても帰って来ません。今朝はどこか遠くへ遊びに行っているのだろうと思つておつとめをしました。おつとめのかねや木魚の音をきけば帰ってくるだろうと思つて……それでおつとめがすんでからジョンの小屋の所を見て見ますと、いました。いました。

ああやっぱり帰って来たなあと思つて見ましたが少し様子が変わります。足を四本共投げ出して顔は仏様の方に向いていますが目をあけていません。園長先生が窓をあけて「ジョンよ」と呼んでも動きませんし尻尾もふりません。「おかしいな」と思い乍ら玄関から出て行つて「ジョンよ」と呼んでも動きません。身体にさわつて見るとまだあたたかいのですが全然「いき」をしていません。死んでいるのです。

園長先生はびっくりして「ジョンどうしたのだ」と聞きましたがもうおそいのです、園長先生の目から涙がぼろ／＼とおちました。家中の人に知らせました。奥さん、まだやすんでいた子供達まで急いで起きて来てジョンのまわりに集つて名を呼びましたがもうジョンの尻尾は動きませんでした。

本当に可愛想ですがどうすることも出来ません。園長先生は新しい白い布を出して来て動かなくなったジョンの身体をきれいにつつみました。奥さんや子供達はジョンの小屋の前に一段高く台をおいてそこへジョンをおきました。庭のすみに咲いていた白い花を取つて供え香炉を持つて来てお線香をあげて手を合せ園長先生のあげるお経をじーっときいていました。園長先生は「利口だったジョンよ、可愛かったジョン、どうかみ仏様の所へ行つてくれ、そして早く生れ替つて又ここへ来ておくれ」と祈り乍らお経をあげました。

保育園の子供が来はじめました。先生方も来ました。ジョンの小屋の方を見ていつもと様子がちがうのをみてびっくりしました。「どうしたの?」「ジョンはどうしたの?」と云い乍ら来てびっくりし、「可愛想だねー」といい乍らお線香をあげて小さい手を合せて拝みました。先生方も、特に給食の先生は目を泣きはらしていつまでもいつまでも拝みました。子供達がみんなジョンのまわりに集つて手を合せて拝み乍らじーっと立っています。ジョンが元気だった時のことがみんなの頭の中に思い出されてくるのでしょう。子供達が帰る時いつも先生と一緒にゐる子供のアとになつたり先になつたりして送つて行ったこと、国道を渡る時自動車はげしくてジョンだけ渡れずに段々と東の方へ東の方へと追われて

しまいに子供達を見失ってうろ／＼しているのだから先生が迎えに行ったこと、お砂場で遊んでいると一緒にバスの中へ乗り込んで動かないので園長先生がだいておろすと一緒に行くんだとバスのドアを引っかいたこと、バスが動きだすと「わんわん」吠え乍らあとを追いかけたこと、レコードをかけると時々それにあわせて「ウォー ウォー」という声をだした事等思い出しているのでしょう。

あとでわかったことですがジョンが亡くなった朝保育園の近所で犬が八頭程も道路に死んでいたそうです。きつとだれかが犬のすきな食べ物の中に悪い薬を入れておいたのだろうか。と近所の人は話していました。よその犬は道路でそのまま死んでいたのにジョンだけ保育園の自分の小屋の所へ来て死んだのはきつと園長先生がおつとめをするかねの音をきいて苦しいのをがまんして最後の力を出して歩いて来たのではないだろうか？と先生方は話していました。やがて園長先生が息子さんと娘さんと一緒にジョンをだいて車に乗せ火葬場へつれて行くことになりました。園の子供達は最後のお別れに「のーんのん、ののさまほーとけさーまーおーててあわせておがみーましよう。のーんのん、のんーののさまほーとーけさーまーおーめーめつーぶーっておーがーみーましよう」と歌

ってくれました。それから先生と一緒に門の所へ並んで「ジョン、さようなら」「ジョン、さようなら」と手をふり乍らいいました。先生方はハンカチで涙をふき乍ら……給食の先生は車のあとを追いつて手をふってわかれをおしめました。ジョンの車が見えなくなるまで、いや、見えなくなってもみんな動こうとしませんでした。ジョンがいなくなった保育園は何か一つ物が足りなくなったように淋しくなりました。夏休みでお休みしている子供達がお休みが終って出て来た時ジョンがいなくなったのを聞いてどんなに淋しがるでしょう？

こうしてみんなに送られて行ったジョンは、しあわせな犬だったでしょう。子供達と一緒に遊び、子供達を守り、仏様のごはんを頂いて大きくなったジョン、今頃はきつとみ仏様の所で、仏様に可愛がられ乍ら遊んでいることでしょう。

御法語をいただく

悪をしのばんがために、たとえ心におもうとも、ほかまではあらはさじとおもいて、おさえん事は、すなわち仏に恥る心也。ともかくにも悪をしのびて、念仏の功をつむべき也。

(十二個条問答)

善人らしく見せかけの行為をする偽善者は卑しい人であります。それは他の目的のために、本心からでない善行をなし、何かの利得を期待する性根を卑しむのであります。しかし人の本心を赤裸々にいえば、自分の利得をはかることばかりであります。仏さまに対して恥かしいから悪をしないというのでなく、何れも人前を飾らんとするものであります。それなら一層のこと心の向くままに振舞った方が、純真であり正直というべきでないでしょうか。

仏さまはどんな悪人に対しても、決して見棄てないばかりでなく、お念仏を唱えれば、十惡五逆の極悪といえども往生できるのですから、こちらの方も偽ることなく純真な生活をした方がよいのでないでしょうか。

こうした疑問に対して答えられたのが、この御法語であります。

善に近づき悪から遠ざかるために、たとえ心の中で悪を思っても、これを外面に現わすことなく自制してゆくことが即ち仏さまに恥る心であります。従って何はともあれ、悪から遠ざかるよう努めながらお念仏を唱えて、日常を過すべきであります。

このように記すと、何んの変哲もない話のように聞えますが、自分の生活に真剣にとり組んでゆけば、これが重大な問題となります。少しでも力強い信仰に生きんとし、生活を純化してゆくために努力すればする程、反省する心が深刻になり、僅かなことでも疑わしくなり、そのまましておけぬ気持になります。凡夫の行う善行について段々と考えてゆけばどれがほんとなのか解らなくなつて、上人に質問をしたわけでありす。それに対する上人のお答えは、いわば至って常識的なお詞ですが、万古不易の真理といった確固さを感じられます。もう一つ申せば、上人に向つて教を乞う人も、上人のお答えも何ら特別なことがなく平々凡々たるところに念仏行者

としての味があると存じます。

(村瀬秀雄)

先月号の訂正

頁	誤	正
1	住。藤良智	佐藤良智
1	東魏天竜山	中宮寺如意輪観音
4	王ぎえ	王儀之
9	こままだ	ここまで
19	行誠上	行誠上人
29	三身ナカ	三身十力
29	証証権現	証誠権見
32	下3	念仏を説かれ
		念仏を説かれ

近代高僧伝

望月信亭

大橋俊雄

南に村国山をおい、眼下に日野川をのぞむ山村越前国今立郡国高村に勝次郎が生誕したのは明治二年九月二十四日、秋も漸く深まろうとする頃であった。父を松原新六兵衛といい、隣には清誓寺という真宗の道場があった。十二歳の時、縁あって武生に巡錫中であつた加納法宣の弟子となり、新保の円海寺で得度をうけ名を信亭と改めたが、法宣につれられ家をあとにした時、彼を見送つたものは母一人で、他は野良に出ていた。それほど彼の出家はあわただしいものであつた。

彼が雪に埋もれた北陸路をあとにして知恩院山内にあつた西部大学林に入學したのは十九年二月であり、二十一年には浄土宗学本校に転じ東京の人となつた。その頃彼の同窓に

は荻原雲来・渡辺海旭等が居り、常に良き競争相手として勉學にいそんでいたが、望月はどちらかといえば渡辺などに比べ天性のひらめきには欠け努力精進の人であつた。二十八年業成るや共に内地留學生を拝し、時に彼は天台學研究のために比叡山にのほつた。そして一切の俗界をさけ、ひたすら研究に没頭したことが彼の學問をそだて大成させた大きな原因となつてゐるが、それにもまして學問探求の原動力となつてゐるのは、卒業時彼が首席（二位渡辺、三位荻原）で卒業してゐるにもかかわらず、語學は兩人に劣つてゐるからとの理由で海外留學することができなかった口惜しさ、この時以來「何くそ俺だつてやつてみせるぞ」と腸の底から叫んだ一念、こ

れが彼をして英語を堪能になさしめた原因であり、學問的にゆるぎない地盤をきずかさせた大きな力であつた。

京都遊學の時のこと、日蓮門徒が妙満寺で布教した念仏無間をとりて、浄土の教義を誹謗したことがあつた。偶々これを耳にした京都支校の生徒たちは奮然としてやしがつたけれども不術はない。義憤の念はつものけれども応酬できる素養は残念ながら身につけていない。丁度その頃信亭は浄土三部經は法華經よりはるかにすぐれたものであるという、いくつかの論拠を示した論文「壽觀弥陀三經と法華經との優劣」を書いてゐた。この論文あるを知り、早速手にし、こおどろして喜んだ支校の生徒たちは、これを金科玉条とし恰かも演説中の日蓮門徒をめかけ、逆に浄土のすぐれていることを説くと共に、演説台をたおし、ローソクや茶器をこわしたという一幕があつた。

血氣盛んなりし明治時代の頃の彼等の意氣がうかがえると共に、宗門を愛する熱情の如何に深かつたかを知ることができよう。この時の張本人こそ後の原聖道であつたという。

信仰にもえ、浄土信仰を根強くいだいた、当時の学生の意気がうかがえてたのもしい。その後永養寺で彼が日蓮反駁の演説会を開くときいたとき、日蓮門徒は徒党をくんで報復にやってきたのは勿論、論文をもつてのぞみ、反駁に反駁をくりかえしたことも屢々で、仲々はなやかに宗論に花をさかしたこともあった。論諍といえは常盤大定博士を向うにまわし、大乗起信論はインドの撰述ではなくシナ出来のものであることを主張したこともあり、又親鸞抹殺論をかざしたこともあったが、その後三十二年高等学院教授となり、四十一年には宗教大学教授に、大正三年三月には学長となった。この間彼は法然上人全集も出版すれば、仏教大辞典にも力をいれ、更に南条文雄・高楠順次郎・大村西崖等の協力を得て大日本仏教全書の刊行にも力を注ぎ、大正十三年九月には「浄土教の起源及び発達に関する研究」で文学博士となったが、学長は宗教大学が廃校される昭和三年まで実に十四年の長い期間つとめあげた。しかしそれも束の間、同五年四月には大正大学長となっているが、

このような学長という激務の中にあつて、最も力をそそいでいたのは仏教大辞典の編纂であつた。能力に応じ特意とする所の項目を分担して、辞典編纂の一翼になつていたのは、彼の膝下にあつて蕨陶をうけた門下生たちであつたが、それらの人々たちによつて書かれた論文に彼は細大もらさず目を通し、補足



したり削除したりするのは勿論、引用文は原文にあつて誤脱の有無を点検し、文体を整えたりした。従つて原稿が朱にそまり、初稿の姿すら残っていないものもあつた。それほど心血をそそいだ辞典編纂のために、五時起床してから夜七時まで昼食と講義以外は決し

て席をはずされなかつたという精進振りであつた。かくて別巻附録として七巻、六千五百頁におよぶ空前の大辞典の大業は、明治三十九年企画発願してより昭和十二年六月まで、実に三十二年の歳月をよみし、何時しか六十九歳をむかえていた。

翌十三年四月黒谷金戒光明寺を董じ、二十三年三月には知恩院門跡となり、浄土宗管長となつたが、彼は常に後進の育成に心をいためていた。仏教文化研究所を黒谷に設けたのも祖山に董じてからの知恩院に移したのも学問の興隆と学徒の養成に主眼がおかれていたからであつたが、彼自身も二十二年学士院会員に推されて、学者らしい終生をおくることができた。彼の号は望無雲というが、無雲は英語のムーンを漢字におきかえたものであつたから、望無雲というのは望月という意味であり、一面彼は美食家で、きれいな肌つやをしていた。そして心念のあつた北国人らしい気骨のある彼の性格は、後世のこるべき幾多の仕事なさをしめ、宗門に一大金字塔をきずいて二十三年七月十三日八十歳を一期に寂然として遷化せられた。法名を晃運社昱誉上人明阿望無金雲信亨大和尚という。

三部經の再発見 (六)

須藤隆仙



三部經の主体

三部經の主体となるものは、なんでありましょうか。それは申すまでもなく『念仏』であります。ですから曇鸞大師は『往生論註』の中で「仏の名号をもって經体となす」といっておられます。

そして、このことはたいへん大切なことで、このことを正しく信解することによって、正しい仏教信仰をもつことが、可能とされるのであります。

というのは、例えば日蓮聖人などは、經の主体は題目である、といっているのであります。『報恩鈔』という著書の中で、大經の肝心(主体)は「仏說無量壽經」の題目であり、觀經の肝心は「仏說觀無量壽經」の題目であり、小經の肝心

は「仏說阿彌陀經」の題目であり、法華經の肝心は「妙法蓮華經」の題目である、といい、また『選時鈔』という書の中では「念仏と申すは双卷經(大經)、觀經、阿彌陀經の題名なり」といって、あくまでも、經の体は題名にあると主張しております。日蓮聖人のこの見方は、独特のもので、とくに淨土三部經の名をあげて、その主体を題目に求めている点は、注目させられることですが、これが日蓮義のたいへん間違っているところで、經典の主体を正しく把握できないのであります。創価学会のような無茶なものが生れてきているのであります。

經の主体というものは、經の題名(題目)にあるのではなく、その經の内容、つまり衆生濟度の方法にあるのであります。それは「經」というものは、釈尊が、衆生を救わんが

ために説かれたものだからなのであります。例えば法華經に「如来の演ぶるところの經典は、皆衆生を度脱せんがためなり」と説いておられる如く、經の肝要は『衆生得脱の法』にあるのであります。『薬用植物図鑑』という本があります。が、この本の肝心「薬用植物図鑑」という題目にあるのはありません。その中に書かれている薬用植物の用い方にあるのであって、「薬用植物図鑑」という題目を千万遍唱えたところで、病氣は良くなりません。その中に書かれてある用法を読んで、それを実行してこそ、はじめて病氣をおすことが出来るのです。ですから著書の肝要は題目でなしに、中の教示にあるのであります。

『念仏』とは三部經の中の教示であります。お釈迦さまは、三部經のいたるところで念仏をとなえよ、念仏をとなえよ、と教示されておられる。そしてそれこそ衆生得脱の法であると強調しておられる。そのことが三部經の肝心（主体）であって、ために衆生得脱の大法こそ「念仏」であり、三部經の肝心は念仏なのであります。

（日蓮聖人などは、このところが解らぬため、題目が經の肝心であるといったかと思うと、こんどは「妙法蓮華經の五字は經文に非ず、その義に非ず、唯一部の意のみ」四信五品鈔などといって、題目は經の肝心ではないといっ

てみたり、創価学会でも、故戸田会長は、法華經の解釈書の中で、『南無妙法蓮華經』などといっているのがあります。やはり内心題目だけでは心細いとみえて、南無妙法蓮華經仏といって、仏名をつけて、お念仏にしてしまっているのではありません。滑稽なことですが、これがじつは正しいことで、法華經を本當に信仰したら、「南無妙法蓮華經」の題目でなしに、「南無阿彌陀仏」の念仏にならなければ、正しい法華信仰ではないのであります。なぜかという、法華經の一ばん大切なところは、寿命品で、この寿命品は、インドに出現した釈尊の本當の体（真身）である無量寿の仏、無量久遠の生命仏を説いているのであって、その生命仏こそ、無量寿仏、つまり阿彌陀如来さまであります。即ち法華經は中に阿彌陀仏を説いているのであって、「南無妙法蓮華經」などと、いいかげんなことをいわず、はっきりと「南無阿彌陀仏」と仏名を称えてこそ、本當の法華信仰の功德をいただくことが出来るのであります。）ですからお釈迦さまは、特にこのところをご注意なされるに、觀經十四觀の中で、「大乘十二部經の首題の名字を讀するにあえり。かくの如き諸經の名を聞くをもつての故に、千劫の極重の惡業を除却す。智者また教えて合掌叉手して南無阿彌陀仏と稱せしむ。仏名を稱するが故に五十億劫生死の罪

を除く」と説かれ、經の題目では千劫の罪より除かれぬが、南無阿彌陀仏の念仏では、五十億劫もの罪を除くことができるという、題目でなしに、念仏でこそ本当に救われるのだと、特に教説しておられます。

かようなわけで、經の体たる念仏を信仰していくことが、お釈迦さまが教えられた正しい仏教徒のあり方であろうと思うのであります。

念仏の絶対価値

つぎにこの經体としての念仏の絶対価値を、三部經の上に知るのであります。

それは三部經の中に、念仏が過去・現在・未来、三世を救うものである、として説かれているからであります。現今の新興宗教の中には、単に現世だけ幸福であれば、それでこと足りる、としているものもありますが、本当の幸福とは、三世共に幸せんことであり、本当の宗教とは、三世共に働きかける力でありましょう。この意味で三世を救う念仏は、絶対価値をそなえているものであります。そのことを、三部經に説かれた釈尊の金口によって味わせていただきます。

まず念仏の過去の救いを見てみましょう。大經には念仏することによって、如来の慈光に照らされて「三垢消滅し身意

柔軟なり、歡喜踊躍して善心生ぜん」といい、觀經には、仏名を称するが故に、五十億劫、ないしは八十億劫、生死の罪を除く、と説いておられます。それは千年の暗室が一時に光明を得た如く、過去一切惡の消滅であり、過去一切惡の救いであります。元祖上人もこのことを「念仏三昧は重罪なお滅す。いかにいわんや輕罪おや。余行は然らず。或は輕を滅して、しかも重を滅せざるあり。或は一を消して、二を消せざるあり。念仏は然らず。輕重かね滅し、一切あまねく治す。たとえば阿伽陀藥（藥の名。不死藥ともいう）のあまねく一切の病を治するが如し。故に念仏をもって王三昧とす」（選釈集十一）と教えられ、雪のうちに仏のみ名を唱ふれば、つもれる罪ぞやがて消えぬる」と詠んでおられます。

つぎに現在の救いとは、大經に念仏者を「この人は大利を得たりとす、すなわちこれ無上の功德を具足す」といい觀經に「この人はこれ人中の分陀利華（蓮華）なり、觀世音菩薩、大勢至菩薩、その勝れたる友となる」といい、小經に「みな一切諸仏のために共に護念せられて、皆阿ノクヲ三ミヤク三菩提を退轉せざることを得」といっているそれであります。そして先の過去の救いと、この現在の救いとが、念仏の『現益』といえるわけです。善導大師が『觀念法門』や『往生礼讃』で、さかんに念仏の現益を説き、元祖上人も選

伏集十一や十五にこれを説いておられるのも、じつにこの三部経の仏説によったものであります。

三ばん目に未来の救いですが、これは説明するまでもないでしょう。念仏することによって、浄土に往生するということが三部経の中核で、これが『現益』に対する『当益』であります。しかも浄土に往生するということは、最低の凡夫が、最高の境界に開かれていく、ということですから、仏教の中心が、この念仏の教えに示されているわけであります。

一体、先きの過去・現在の救いといい、この未来の救いといい、じつに最下位の凡夫が、大利無上の功德を得、過去一切の罪を滅して清浄となり、泥の中の蓮華と咲きかわり、諸仏に擁護され、無上最高の境界を開くというのですから、そのような効能をもつ念仏は、じつに無比無類の絶対価値をもっているわけであります。お釈迦さまはために大経を説かれるとき、これから無比無類絶対価値の念仏を説くぞよ、と特にこのことを注告しておられます。それがいわゆる出世本懷で、大経を説かれんとするとき、お釈迦さまは余りにも尊い姿でおられる。それで弟子阿難が、「どうして今日はそんなに勝れたお姿でおられるのか」と尋ねているのであります。するとお釈迦さまは、「三界を救わんために世に出、諸経を説いて衆生をあわれみ、さらに真実の利をもって衆生にほど

こしてやるのである」といわれ、「それは三千年に一度より咲かない憂曇華の如く、あい難く尊いものである」そういつて、そのために今日はいつもと違う姿でいると答えられて、しかるのち念仏の教えを説き始められたのであります。即ちこれから説く念仏こそ、これまで説いたことのない無比無類絶対価値のものである、ということをお釈迦さまご自身宣言されたのであって、大経の中では『真実の利』という言葉でいつておられますが、これが大経五十三仏の前に出てくる出世の本懷（釈尊が世に出られた本意）であります。この本懷を知るとき、念仏の価値、そして共に、それを説いている三部経の価値の無窮さに感泣するのであります。

浄土と私

阿弥陀経に浄土の様子をいろいろ説いて、鳥などもいるが、それは娑婆世界にいるような、罪の報いによって鳥の姿に生れたものではなく、みな阿弥陀如来さまが、み教えを宣派されるために変化されたお姿である、阿弥陀仏の化身である、と説いておられます。

ここところは大切なところで、『往生論』には「かの世界の相を觀するに三界の道に勝過せり」とあり、その三界とは欲望の世界（欲界）、形ある世界（色界）、觀念の世界（無

色界)で、浄土はこの三つを超えた世界である、というわけ
です。するとたいへんむずかしいことになりますが、要する
に阿弥陀経に説く如く、浄土の一切の姿は、阿弥陀如来の法
身が、私達を救う姿に現われて莊嚴された相(報土)で、そ
の救う姿が、池あり、蓮華あり、樓閣あり、宝樹あり、とい
った如くに、凡夫の五官にうったえられたもの、ということ
でありましょう。

ですから本当は、欲なく、形なく、それでいて無形でもな
い、という真如法性(普遍真実)を本体とする世界で、ため
に「勝過三界道」とか「第一義諦妙境界相」(往生論)とか、
「無為涅槃界」(法華讃)とかいわれ、阿弥陀経には過十萬
億仏土と説かれ、觀經には逆に「ここを去ること遠からず」
(去此不遠)と示されているわけであります。

つまり浄土は、私を救う真理の世界ですから、遠くなく、
近くなく、求むればただちに現れ、求めざれば無限に遠い、
真実自在の世界であるわけです。ですから阿弥陀経の「過十
萬億仏土」というのも、単に平面的な距離感覚だけに受けと
らずに、十萬億もの多くの諸仏の世界より、さらに勝過した
世界、勝れた世界、というふうに、立体的な価値感覚で受け
とっていくことが必要であって、觀經に浄土のことを『諸仏
の家』といっているのも、じつにそのためであらうと信解い

たします。

要するに浄土は、子を思う母の慈愛が、オモチャにも、ふ
とんにも、机にも、子供に関係する一切の物に表象されてい
く如く、如来の大慈悲が、池となり、樹となり、花となり、
鳥となつてゐるものであって、その故にこそ諸仏の世界より
さらになお一層私において尊いものとされ、それは最高の真
実が、最低の仮和合(人間)に働きかけたものでありますか
ら、第一義諦妙境界の無限最高のすがたでもあるわけです。

三部経によつて、この浄土の尊さを知るとき、私の心は一
日も早く、その世界に開かれていくことを願ひ、それはその
まま、たつたいまの一時にこそと、緊急に欣慕されるのであ
ります。

大經の四十八願を見ますと、私は逆に人間の愚かさ、至ら
なさ、を痛感するのであります。例えば、第一の願は『無三
惡趣の願』というのですが、これは地獄・餓鬼・畜生を救つ
てやるという願であります。これなども逆をいえば、人間の
世界には、地獄・餓鬼・畜生の相があるということでありま
す。そのようにして見ていけば四十八願の一々は、みな人間の弱
さ、醜さ、愚さ、至らなさ、を細かに上げ、それを一つ一つ
救つてやるという組み立てであつて、そこからは多く人間の
弱点を痛感し、発見し、反省させられることであります。そ

してそこから重ねて救われなければならない必要を感じ、それよりもっと、だまっても救ってしまおう奥深い力の實在を、全身に知るのであります。

そのことは、虚弱な人間が発見されたときそこにすでに救いの實在が現れていたことでしようし、法蔵菩薩とはその救いの實在の総称でありましょう。不可思議の無辺世界は、虚弱な人間を送り出して、それより先きに救いの實在をその行く先き先きに充満させているのであります。それがまた四十八願の命でもありましょう。このところで、阿弥陀という仏は、高いところにおいて、私から仰がれるものではなく、逆に私の足下にある無限の實在であることを知るのです。私の上に在るのが阿弥陀仏ではなく、下に在るのが阿弥陀仏なのであります。つまり私は、阿弥陀仏を常に仰いでいるのではなく、いつもその上に抱かれていたのであって、阿弥陀仏の膝の上に私がいるのでありましょう。本当ならば無限の奈落に落ちていく私が、阿弥陀仏の膝上にいるからこそ沈まずにおれるのです。

三部経はいたるところにこの真義が発見せられて、無量無辺つぎることなき再発見が生命の息吹きとなるのであります。

(完)

編集後記

▽騒々しかった地方選挙もおわり第三勢力となった創価学会の今後のゆくえをセンサクしているとき浄土教団に対してバクダンの発言がなされている。渡辺照宏氏の「アミダ仏信仰はどこで作られたか」(大法輪六月号)がそれである。ドイツのエーデル教授の見解を紹介して、アミダ仏信仰は仏教として新奇の説であり、東アジアにおいてはじめて一個の宗教として成立した、という説に同意されているのである。

▽別にこのくらいで浄土教徒が右往左往することもないが只一笑に付すだけでなく、いろいろの面で自信教人信の真摯な態度を甦らせる必要があろう。

▽その意味から、須藤隆仙師の三部経の再発見は熟読に価する。師は現代の問題意識の中に、浄土教を再検討しようと努力されている篤学の士である。今回は残念ながら本稿をもって完結するが、今後に期待したい。

▽一年間大変な苦勞をされてアメリカ旅行を執筆された、佐藤治子夫人は、いまヨーロッパ旅行をされている。ヨーロッパ紀行がまたれる。

日本一の生産・設備

梵鐘 (45cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (12cm~51cm)

音響理學博士青木一郎先生

梵鐘界の權威 日展 藝術院賞受賞 参事 香取正彦先生



詩物師 老子次右衛門

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分(梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 04 8847番 本社工場 高岡市横田

◇日日の修養と無言の布教◇

修養ひめくり

価 格 100 円 送料実費

(10部以上割引あり)

美麗2色刷 32枚綴 上質紙使用

法要その他の記念品に最適(箱入・寺名等刷込の相談に応じます)

申込先 東京都千代田区 飯田町1の21 法然上人鑽仰会 振替東京 82187 電話(332) 5944

「浄土」講読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 七月号

昭和十年五月廿五日
第三種郵便認可

昭和三十八年六月廿五日 印刷

昭和三十八年七月一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関二三男

印刷所 新光社印刷株式

会社

東京都千代田区飯田町一ノ二二

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京三三二局五九四四番

振替東京八二一八七番

昭和十年五月廿五日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和三十八年六月二十五日印刷 昭和三十八年七月一日発行

浄土

第二十九卷

第七号

定価金五拾円(六円)

(送料)